

日清戦争と仁川(中)

日本と清国が実際に戦闘状態に入ったのは明治 27 年(1884)7 月 25 日の早朝だった。日本は 19 日に 5 日間の猶予つきで最後通牒を清国に突きつけており、いつ戦端が開かれてもおかしくない状態にあった。

日本海軍の第一遊撃隊である巡洋艦「吉野」、「秋津洲」「浪速」はこの日、朝鮮半島西岸の豊島付近で通報艦「八重山」、旧式巡洋艦「武蔵」と落ち合う予定になっていた。水平線に二条の煙が見えたため近づいてみると清国海軍の巡洋艦「済遠」と「広乙」だった。すぐに撃ち合いとなり、戦闘開始後 8 分で「吉野」の 4.7 インチ砲弾が「済遠」の艦橋に命中した。すると「済遠」はマストに白旗と日本軍艦旗を掲げ、降伏の意思を示した。

「広乙」はなおも抵抗を続けていたため「秋津洲」が岸の方に追い詰めると座礁、乗組員は全員上陸して船を爆破した。このとき降伏したはずの「済遠」が逃げだした。これを追いかけているとき現れたのが清国の砲艦「操江」と英国の旗を掲げた輸送船「高陞(こうしょう)号」だった。「済遠」は逃げたものの海戦は日本が勝利した。

「操江」は「秋津洲」がすぐに拿捕、「高陞号」は「浪速」が対応することになった。英国船籍だけに対応は難しい。「浪速」の艦長は東郷平八郎大佐だった。まず臨検してみると「高陞号」は英国の商社ジャーディン・マセソン所有の船で清国にチャーターされ、1100 人の兵士と 4 門の大砲を牙山に運ぶ途中だと判った。花房公使が一時開港場の有力候補に上げていたあの牙山であり、清国はそこに兵力を集めていることが明らかになったのである。

東郷艦長は船を抑留しようとしたが船員は応じる姿勢を見せたものの乗っていた清国兵が抵抗する態度を崩さなかったため撃沈した。このニュースが英国に伝わると、自国の船が沈められたという反感から世論が沸騰、反日感情が巻き起こった。しかし高名な国際法学者 2 人が新聞に「日本の行動は国際法上正しい」という論評を載せたため世論は静まった。日本では、東郷艦長は国際法をよく知っているとして評価が高まった。

清国軍は牙山にいると分かり、その撃滅を任されたのがイザベラ・バードも接触した大島義昌少将麾下の混成旅団で、仁川から漢城郊外の龍山に移り駐屯していた。袁世凱が 7 月 19 日帰国したため自由になった朝鮮政府からも清国軍排除の要請があり、混成旅団は 7 月 28 日、龍山を出発した。途中、待ち伏せに遭い局地戦では苦戦した部隊もあったが、牙山東方の成歓駅周辺での戦闘で清国軍主力を大破、清国軍は平壤へ逃れていった。

一方、兵站基地になるべき仁川港では難題が起きていた。港湾監理署が韓国人労働者に対して「一般貨物を運ぶのはよいが鉄砲、弾丸、火薬類を運ぶ仕事に従事してはならない」という通達を出したのである。清国から任命された税関吏員の働きかけのためと思われる。この結果、日本の軍需物資を運搬していた韓国人労働者が逃げだし、新規採用もできなくなった。結局日本から労働者を連れてくるしかなく、数週間が浪費されている。

日清戦争と仁川(下)

日清戦争の天王山になると予想されていたのが平壤での戦いである。清国の李鴻章は全軍を平壤に集めるよう指示、満州(中国東北部)からも続々と兵が南下していた。その様子をなんとあのイザベラ・バードが目撃していたのである。イザベラ・バードは 6 月 21 日に仁川に入り、港の様子や日本軍の野営地を訪れるなど 1 日を過ごしただけで英国副領事から「危険だから退去せよ」と警告され、日本郵船の肥後丸で満州に避難、奉天(現瀋陽)に滞在していた。激動する歴史を何度も目にした幸運な女性といえる。女史は書いている。

「行進とはほど遠いならだらしな歩き方で、10 人ごとに大きな絹地の旗を掲げているが近代的な武器を装備している兵はごく少数しかいない。ライフル銃 1 丁持たない屈強な体つきの軍隊さえある。なかにはジャンジャール銃をそれぞれ 2 人で運び、ほかの兵は鎗だらけで旧式の先込めマスケット銃か長い火縄銃をもっていたり、あるいは槍か赤い棒の先に銃剣をつけただけという隊もある。正確無比の村田式ライフル銃を持っている日本軍を相手にこのような装備の兵を何千人も送り出すのは殺人以外のなにものでもない」

それでも清国軍が何千人も南下していると聞くと、朝鮮政府の実権を握っていた大院君が怯えはじめた。このた

め第五師団長の野津道貫中将は早期決戦が必要と判断、兵站到問題があるとわかっていたが8月21日、混成旅団を含む全軍に北進を命じた。

これに対して清の李鴻章は牙山から逃げてきた衛汝貴を総司令官に任命した。これが日本軍に幸いした。日本軍の勇猛さを体験した衛司令官は配下の武將を集め、戦わずして撤退することを提案した。武將の間に動揺が走り、戦意を失った将軍が多かった。その中で奉天軍を率いる左宝貴将軍が猛反対、籠城と決まった。

日本軍は3方から進軍、予定どおり9月15日までに平壤城を包囲、午前6時から総攻撃を開始した。予想よりは激しい抵抗があり、なかでも左将軍は果敢にも城から打って出、激戦を展開、午後の早いうちに戦死してしまった。午後4時半過ぎ場内からの射撃がとまり白旗があがった。軍使を送る準備をしているうちに豪雨となり中断、午後9時過ぎ雨が小降りになると城からの脱走が始まった。一部では日本軍による追撃戦が行われたものの暗闇に遮られた。翌16日、場内はもぬけの殻で日本の完勝だった。日本軍の死傷者約700人、清国軍の死者は約6000人だった。

その翌日の17日、黄海海戦が行われた。30センチ砲の「定遠」「鎮遠」を擁する北洋艦隊と日本海軍の総力戦だった。双方は午前10時前に遭遇、7時間に及ぶ死闘を繰り広げた。重装備の北洋艦隊に対して日本海軍はスピードと速射を得意としていたが、結局は日本が勝利、北洋艦隊の5隻の巡洋艦を撃沈した。残った北洋艦隊は旅順港に逃げ込み、黄海の制海権は日本が握ることになった。北洋艦隊はその後旅順からも追い出され、威海衛に潜んでいたが明治28年2月、日本の水雷艇攻撃によって大半が破壊され丁昌汝総督は自決した。

仁川旭町にあった日蓮宗妙覚寺にどういふ訳か「定遠」の扉が1枚保存されていたという。

平壤の戦い、黄海海戦のあと、しばらくして仁川に置かれていた兵站基地は平壤近くの大同に移転していった。

日清戦争後の仁川

牙山の戦い、平壤の戦い、黄海海戦と続けて勝利した頃から、仁川へやってくる日本人が急に増えてきた。データによると明治27年9月20日から10月20日までのわずか1ヶ月間に994人ものが定期船の肥後丸、豊島丸、潮州府丸から降り立ったのである。仁川の各国領事館のほとんどは清国びいきであり、牙山の戦いの最中、「日本は負けた。清国軍が仁川にやってくる」と悪質なデマを流した領事がいて、パニックになった数十人が日本に帰ったという事実があった。安全と分かり引き返してきた人もいたろうから全部が移住者ではなかったがそれにしても来航者が多い。

残されている内地人口推移をみると明治26年(1893)425戸2504人、27年511戸3201人、28年709戸4148人となっている。あわてて渡航制限措置が採られたため伸びは止まったが狭い居留地の中は人で溢れ、各国居留地の空き地になだれこんだ。もちろん高い地代を払わねばならなかった。

人口急増の結果物価が急騰、生活に困る者も出てきた。仁川領事館は外務省本省に対し「下僕の給料から薪炭食品の物価に至るまで以前の3、4倍の暴騰となっているためひとかたならぬ迷惑を被っている」として俸給の増額を要求した。その結果一等領事は500円アップして3000円に、二等領事は400円アップして2700円に、領事館事務代理は500円贈の2200円に、領事官補は350円贈の1200円に、領事館書記生は280円贈の780円に、領事館付上席警部は240円贈で600円に、もう一人の警部は180円贈で480円にそれぞれ増額されている。地位の低い人たちは6割を超えるペラボーなベースアップをかちとったのであった。本省も物価騰貴の現実を認めざるをえなかったのだろう。領事館員は本省の人たちより給料が2割から5割高くなったのである。これが後に朝鮮全土に波及し、朝鮮での日本人公務員・雇員は本土の人たちより高い給料を保証されるという慣行を生んだのだった。

満州の奉天で清国軍の出征を見送ったイザベラ・バードが三度仁川にやってきたのは明治28年1月5日である。戦争の最前線が清国本土に移り、朝鮮半島は安全になったからである。女史は「朝鮮紀行」(時岡敬子訳、講談社学術文庫)の中で次のように表現している。

「港は前年 6 月の喧噪や活気と奇妙なコントラストを見せていた。外港には外国の軍艦が 2 隻しか停泊しておらず、内港には日本の商船が 3 隻いるばかりである。かつて大きな商店が立ち並び、雑踏にあふれ、取引交渉のわめき声が騒々しく、昼夜分かつた太鼓や銅鑼や爆竹の音が鳴りやまなかった清国人居留地は森閑として人気がなく、イータイ(怡泰)が経営する旅館「スチュワーズ」に着くまで清国人には一人も出会わなかった。日本軍の占領は、この区域を中世の悪疫(ペスト)のように壊滅してしまったのである。日本人街と海岸沿いは殷賑をきわめていた。浜には入ってきた貨物と出て行く貨物が積み上げられている。通りは荷物を積んだ牛やクーリーが大量に行き交うばかりか、山積みにした豆や米を路上で計っては袋に詰めているので、人がやっと通れる混雑ぶりである。物価は高く賃金は 2 倍以上になっており、搾取はなくなって朝鮮人は自発的に働いていた」

石井菊次郎、幣原喜重郎と仁川

石井菊次郎が一等領事として仁川に着任したのは明治 29 年 10 月 7 日である。日清戦争勝利を契機に仁川の人口は大幅に増え、活気のある町になったが、それだけに多くの問題を抱えていた。

最大の問題は土地不足だった。日清戦争勝利の後大幅に増えた住民は、住むところがなく困り果てていた。各国居留地も既に満杯になっており、居留地外にバラックを建てて住む人も出ていた。各国居留地に住む人たちも、広い土地に権利を持っているドイツ人のウォートンらに高い家賃や借地料を取られて不満たらたらだった。そもそも花房公使が仁川を開港場にすると決めたとき、朝鮮政府はもっと広い土地を居留地にしてよいという意向を示していた。けれども花房公使は「7000 坪でよい」と断った経緯があり、居留民のなかには公使館の判断ミスと外務省を批判する声も大きくなっていった。

領事館としても対策はいろいろ練っていた。最も早くから検討したのは日本居留地の前の海面を埋めることだった。しかしこの案にはドイツ領事館が猛反対、歴代の領事が努力したにもかかわらず 10 年近くも棚ざらしになっていた。ドイツが反対したのは、各国居留地の多くを支配している世昌洋行の経営に影響すること、将来建設を予定しているドイツ領事館周囲が日本家屋に取り囲まれてしまうこと、などだった。次に検討したのは萬石洞に日本居留地を新設する案だった。居留民会もこの案には賛成し一時は実現しそうだったが、造成費用がかさむことがわかり、中止になっていた。

石井領事は着任すると海面の埋め立て案を実現させるべく、障害になっていたドイツ領事との会談を重ねたのである。ちょうど、外務省に入って研修を終えたばかりの幣原喜重郎が領事官補で仁川に赴任してきた。石井領事は幣原も使い、2 人のコンビでドイツ側を説得した。「仁川の発展のためにはどうしても埋め立てが必要である」と繰り返す 2 人の主張にドイツ側も納得せざるを得なかったのだろう。その代わり埋め立て地は住宅用にせず、倉庫か公共性の高いものにするという条件がつけられた。

各国使臣会議の了承を得て明治 31 年 8 月 17 日、朝鮮政府から埋め立ての許可が降りた。工事費用 5 万円は第一、第十八、第五十八銀行から借入れ。工事は翌年 5 月に竣工している。居留地内の倉庫や貿易関係、港湾関係の会社、建物を移し、居留地にはややゆとりが生じた。埋め立てたところは海岸町、港町になった。石井領事は海面埋め立てを実現した恩人と住民から長く記憶されていたのである。

石井菊次郎はのち外務次官、フランス大使、第二次大隈重信内閣で外務大臣となった。その後再度フランス大使となり、国際連盟が設立されると日本代表を務めた。昭和 20 年 5 月の東京山の手大空襲のとき行方不明になり、死亡したと推定されている。

幣原喜重郎は外務次官のあと加藤高明内閣など四内閣で外務大臣を勤め、国際協調を重視する「幣原外交」を展開、戦後第 44 代内閣総理大臣になったことは周知の通りである。

タウンゼント商会

仁川で最も早くから活動を始めた外人の商人として米国人のタウンゼントがいた。金玉均に会ったのがきっかけといい明治 18 年(1885)、仁川にやってきた。同じく米国人のモースと共同で「モース・タウンゼント商会」を設立、火薬や船を朝鮮政府と取り引きしたほか、仁川-漢城間鉄道敷設権を取得したほか金や石炭の採掘権取得を目指すなど派手な動きもみせていた。27 年にはモースと分かれて「タウンゼント商会」と名称を変更した。

そのタウンゼントが仁川に大きな貢献をした。米国で発明されたばかりの蒸気式精米器を持ち込んだのである。当初は米の輸出を禁じられていた仁川港だが明治 23 年の大豊作を機に解禁され、米輸出が急増した。そうになると精米業が必要になる。工場はいくつか出来たがいずれも旧式で、動力は使うものの臼を並べて杵でつく方式だった。なかには石を混ぜたり石灰を入れて白くみせたりする悪質な業者もあった。

タウンゼントが輸入したのは「エンゲルポック・ライス・ホーレル」といい、摩擦力で糠をこすり取る方式。きれいな白米になる。紛れ込んだ石も粉々にして糠の方に分離される。穀物貿易商の奥田貞二郎と共同出資で「タウンゼント精米所」を設立、業務を始めたところ大変な評判になった。他の業者もタウンゼントを通じて同じ機械を購入したばかりか、新規に精米所をつくる人が続出した。力武精米所、加藤精米所、杉野精米所、河村精米所など有力企業が育ち、仁川は精米業が一大産業になったのである。終戦に至るまで仁川の経済界は精米業者が支配することになった。

こうした実績でタウンゼントは仁川の各国居留地会での有力者となり、会長を何期も務めた。しかもタウンゼントは大の親日家であり、日本領事館の支えになった。ある領事は本省への報告書で要旨次のように書いている。

「タウンゼント氏は純良なる日本党である。日本婦人を娶り、愛児を日本に留学させる等、半分は日本人である。日本人よりも熱心な日本党だと言う人もいるし、本人もそう思っている。居留地問題で日本に莫大な便益をもたらしてくれている」

ここに書かれている愛児というのは、ボクシング・ファンなら忘れられない名トレーナー、エディー・タウンゼントである。ハワイでトレーナーをしていたとき、力道山に口説かれて来日した。力道山はまもなく刺殺されたがエディーはリキ・ジムの藤猛をスーパー・ライト級の世界チャンピオンに育てあげた。さらにフライ級の海老原博行、ライト級のガッツ石松、フェザー級、スーパーフェザー級の柴田国明、ライトフライ級の友利正、ミニマム級、ライトフライ級の井岡弘樹とつぎつぎ世界チャンピオンにした。6 人もの世界チャンピオンを育て上げたの、エディーがボクサーの資質を見抜く眼力をもっていたからであり、全て自分から誘っている。昭和 63 年 1 月 31 日、井岡のタイトル防衛戦観戦中に具合が悪くなり、翌日死去した。

ロシアの進出

日清戦争で日本が勝利した後、李氏朝鮮の政治は混迷を深めた。高宗の後閔妃をはじめそれまで清国を頼りにしていた人たちはロシアを頼るようになった。日本は、3 国干渉で遼東半島を返還させられたから頼りにならないとみなされていた。これに対して国王・高宗の父である大院君は生来の攘夷思想によってロシアを嫌い、日本は大院君に接近していた。

こうした中で起きたのが閔妃殺害事件である。明治 28 年(1895) 10 月 8 日未明、王宮に暴漢が乱入、国王と太子が見ている前で閔妃は殺されてしまった。大院君が政権に復帰し、親日派の金弘集が首相に就任した。事件の首謀者は大院君という噂が流れ、裁判でそう認定されたケースもある。暴漢のうちの日本人は日本政府に拘束され広島で裁判にかけられたがいずれも無罪となった。そのなかには与謝野鉄幹もいた。現在では日本の三浦梧楼公使が主導したとされている。

事件から 4 ヶ月後の明治 29 年(1896)2 月 11 日、極東を震撼させるセンセーショナルな出来事が発生した。高宗

が太子とともに女装して王宮を抜け出しロシア公使館に駆け込み、そこを行在所にしたのである。イザベラ・バードの取材によると、一週間前から女官たちが女物の輿で何度も出入りし、看守が注意を払わなくなったのをみて実行していた。イザベラ・バードは、その日のうちに市内に張り出された勅書の内容から、国王は王宮内には自由がなく自らの意志でロシア公使館に赴いたと推定している。勅書にはこう書かれていた。

「朕の不徳と失政ゆえに悪者が重用され、賢者が疎まれた。この 10 年間、紛争なしに過ぎた年は 1 度としてない。紛争のあるものは朕が国政の士として信頼した者がもたらし、またあるものは朕の骨肉がもたらした。(中略)さいわいにも、忠誠心に富んだ臣下が悪徒排除の正しい努力に立ち上がってくれたので、これまでに経た苦難が国に活力を与え嵐の後の静けさが戻る希望はある。(中略)朕は慈悲深き者たらんと努力する。しかし 1894 年 7 月および 1895 年 10 月の事件に関わる首謀者にはいかなる容赦も加えない」

1894 年 7 月の事件というのは、日清戦争への環境づくりのため日本軍が景福宮に乱入、クーデターを起こして大院君を擁立したことをさしている。勅書には日本と大院君への恨みが込められていた。

勅書を張り出した直後、金弘集首相は罷免、街頭で斬首され、親露派の金炳始を首相に李範晋、李完用らを閣僚にした内閣が誕生した。

ところが前日の 2 月 10 日午前 8 時、仁川港に停泊中のロシア軍艦「コルニコフ」から士官 5 人が武装した水兵 107 人と大砲 1 門、駄馬 34 頭を引き連れて陸路漢城に向かったのを仁川領事館員が目撃していた。現在の歴史書ではこのロシアの武力を背景に親露派が国王をロシア公使館に行くよう強要したとされている。

新内閣はイザベラ・バードも驚くほど保守的で、日本の忠告で改革した諸制度を全て破棄、昔の制度を復活した。その結果、再び賄賂や買官がはびこるようになった。ロシアに対して石炭や金鉱の採掘権を与え、月尾島にも石炭置き場を認めるなどロシア優遇策が目立つようになった。